第二章　自己表現につながる音読指導

1 指導の背景：音読の意義

実践的コミュニケーション能力の育成を目指す指導の中での音読の意義

(1)文レベルでの発声練習が可能

①一連の単語を続けて音声化する練習

②それに伴って単語と単語の間で生起する音の化学変化の練習

Ex. “How are you doing?”を「ハユデュイン」のように発音する。

③かぶせ音素（センテンス・ストレスやイントネーション）の練習

英語の発音練習は単語の発音から始めるよりも、文・語句単位で行われる音読練習によって、全体的な音の感覚を把握して、徐々に個々の発音へと進んでいく方がよい。

(2)リーディングやリスニングに必要な直線的英文理解能力（英文の流れに沿って直線的に理解する能力）を育てる

内容を考えながらの音読の繰り返しは、直線直解の力を育むという点で学習者のリーディング力を高めることにつながる。またこの能力はリスニングにも効果がある。

(3)スピーキングへの基礎固めが可能

スピーキングの基礎を培うことができる。しかしただ教科書全部を読ませるだけでは十分な効果は得られず、どれだけ効率のよい音読をさせられるかは教師の専門性にかかっている。

2 指導の実際

(1)音読のバリエーションを増やす

生徒が飽きないように、また音読の機会を多く提供するためにバリエーションを増やす。

ア)教科書の扱い（本文を見ながら音読をするのかどうか）

①教科書の本文を見ながら読む

②本文を見ずに教師の範読を記憶し繰り返す

③教師の範読の間は本文を目で追い、音読するときは本文を見ずに音読する

イ)音読のモデル（教科書の本文の範読を誰が行うのか）

①日本人教師(JTE)の後に続いて音読するのか

②ALT(Assistant Language Teacher)の後に続いて音読するのか

③CD の後に続いて音読するのか

ウ)音読の人数（一度に何人で音読するのか）

①コーラスリーディング(chorus reading)：教師の範読の後に続いてクラス全員で音読をする

②ロールリーディング(role reading)：あらかじめクラス内で役割を決めた上で役割を交代しながら音読を行う

(a)教師と生徒全員の間で役割を決める

(b)クラスを二つのグループに分ける

(c)生徒を二人一組のペアに分けそれぞれのペア単位で行わせる。（ペアの組み方によってもバリエーションが広がる）

③個人読み(individual reading)：一人の生徒（会話の場合は二人）に本文の該当個所を音読させる

④バズリーディング(buzz reading)：生徒一人一人にそれぞれ自分の速度で本文の該当箇所を読ませる

エ)音読の単位（一度にどの程度の長さの英文を読むのか）

①文単位での音読

②節単位での音読

③句単位での音読

④単語単位での音読

文を区切るときは(sense group)の途中で区切らないようにする。

オ)音読のタイミング（教師の範読の直後に音読を始めるのか）

①Consecutive reading：文単位での教師の範読が終了した後に引き続いて一文の音読を行う

②Shadow reading：教師の範読を追いかけながら音読を行う

③Simultaneous reading：教師と一緒に音読を行う

これらは文字を見ずに行うことで難易度が一段と高くなる。

カ)音読の速さ（音読は自然な速度で行うのか）

学習者が音読のスピードをコントロールするのは困難なため、基本的には教師が範読をする際にスピードを調節し、生徒のスピードを間接的にコントロールする方法が有効。

①Learner friendly speed：若干ゆっくりとした学習者に優しいスピード

②Natural speed：母語話者によって話される自然なスピード

③Accelerated speed：意識的に速めたスピード

これに加え音読をする際の発声法にも気をつけさせる。また実際の指導の際には文や節単位で音読する場合なるべく途中で息をつがず、絶えず息を少しずつ吐きながら文や節を発音し終わるように指導する。この時、生徒に早口にならないように指導する。

(2)音読を加工する
音読のバリエーションに加えて教科書本文にも加工を加えることで音読練習をより活性化することができる。
・英文の一部を空白にする（回数を重ねるごとにヒントを少なくする。）
・空白を自分の言葉で補う（難しい場合は選択肢を提示する。）
・生徒をペアに分け、片方の生徒に日本語で書かれた文を英語で表現させ、もう一方の生徒に正しく再生されているかどうかを確認させる。

(3)創造的音読の進め
なりきり音読
ポイント
・自分にまつわるエピソードを話すかのように音読をさせるため音読の真実性(authenticity)が高くなる。
・主語を三人称から一人称に置き換えるため、音読に伴う認知的負荷が高まる。（言語表現への注目が高くなる）→内在化が促進される。
・ある人物になりきって読むことにより読み手と教材の間の心理的距離(psychological distance)が縮まる。
注意点
①ペアを作り、なりきった役のエピソードを話す側は相手に話しかける調子で音読させる。→棒読みを防ぐ。
②修正を施した文ではなく本文をその場で修正させながら音読させる。→音読しながら内容を考えたり、単に文字を音声化する作業になりがちな普通の音読とは違い、内容が音声化に先行するため実際の発話行為により近くなる。
③なるべく多くアイコンタクトを保ちながら音読させる。また聞き役も相槌を打ちながら相手の話に耳を傾けるようにする。→Read and look up が自然に行われる。

3 まとめ
近年音読が再評価されている。昔ながらの教科書の本文をただひたすら読むだけの音読には限界があり、バリエーションを持たせることが大切である。従来は教科書の言語材料を定着させることに主眼が置かれていたが、これからは音読を英語でのスピーキング能力を育成する手段として位置付ける必要がある。また日本のように国内で英語をコミュニケーションツールとして使う機会が少ない環境においては、教室の中で英語をアウトプットと

して増やすための手段として音読を位置づけるべきである。

- 感想

授業で説明した単語単位だけでなく文単位で発音することの利点は私が中学生、高校生の時には意識していなかったものである。これを意識しながら音読を行えば音をつなげて発音する方法やイントネーションがより身につくのではないかと考える。教師はこの点を生徒に十分に伝えて音読をさせるべきであるだろう。

授業でも話した内容が少しかかわってくるが、いくら音読のバリエーションを増やしたとしても生徒一人一人にしっかりと音読をさせるという作業をしないと音読から十分な効果得られないだろう。教師がいくらコーラスリーディングやバズリーディングを行わせようとしても生徒の中には英語を話すのが恥ずかしい・そもそも英語が嫌いなどの理由で音読を怠けてしまう生徒もいる。私はこれはモチベーションの問題ではないかと思う。そのような生徒に対してどのように音読をさせるかということを考慮しなければこれらの理論は机上の空論となってしまう。このモチベーションを上げそれを保たせるということは英語教育だけではなくどの教科にも当てはまることである。しかしこのことを外して教育を考えることはできないだろう。